談話室 (世界化学年)

40 年間の「ワーキング
ライフ」を振り返って

内 海 房 子

独立行政法人国立女性教育会館
☎ 355-0292 埼玉県比企郡嵐山町
菅谷 728

(2011 年 7 月 23 日受理)

Looking Back My 'Working Life' for 40 Years

Fusako UTSUMI

National Women's Education Center
728 Ranzan-cho, Hiki-gun, Saitama 355-0292

(Received July 23, 2011)

1. は じ め に

私は、今年の 6 月に民間の IT 企業を定年退職し、7 月 1 日付けで独立行政法人国立女性教育会館の理事長に就任した。1971 年に入社してから、40 年という長いサラリーウーマン生活であった。この 40 年間を振り返って、思うところを述べたいと思う。後に続く女性たちに、少しでも参考になればありがたい。

2. 私のワーキングライフ

2.1 入社の頃 (1970 年代)

津田塾大学数学科を卒業し、NEC に入社したのは、大学で生まれて初めて出会ったコンピュータの仕事がしたかったこと、会社が自宅の近くであったことの 2 点の理由からである。当時は、女性が長く働き続けられる職場として民間企業は適切ではなかった。企業に入社した女性社員は結婚や出産を機に、瞬く間に会社を辞めてしまうので「腰掛け」社員と言われていた。長く働きたかったのであれば、教師になるかお役所に勤めるかであったが、私はあえて民間企業を選んだ。それは、先にも述べたようにコンピュータのソフト開発がしたかったからである。民間企業でも、会社が自宅の近くにあれば結婚して子供が生まれても、子供を親にあずけて働き続けることができるのではと考えた。運よく自宅近くにコンピュ

ータメーカーのソフトウェア工場があったこと、両親が健康で子供の面倒を全面的にバックアップしてくれたことなどの好条件に支えられて今があると思っている。

2.2 仕事はコンピュータソフトの開発

1971 年に入社してみると、確かに長く働き続けている女性の姿はなかった。女性管理職など一人もない職場で、キャリアアップなど到底望めそうもないと思われた。しかし、入社して 10 年ほど経ったあたりから全社的な女性活用の流れも出てきて、私の進路にも光が見えてきた。入社後の 10 年を乗り切ることが重要だが、同期入社の女性社員はこの時はすでにほとんどの人が退職していなくなっていた。これでは、女性管理職も生まれないし、職場は女性を活用しようという気にならないというのが実情であった。私が続けられたのは、まず仕事が面白かったこと。それから、私の仕事がソフトの開発という技術的な仕事であったからではないかと思う。技術系の仕事は仕事の成果が目に見えやすいことから正当な評価を受けることができる、本人もやりがいを感じるなどの利点があげられる。男性か女性かという性別をあまり気にせず仕事ができるという点で、技術職というのは女性向きの仕事ではないかと思う。

2.3 男女雇用機会均等法の施行 (1980 年代)

私が長く働き続けただけでなく、管理職に登用され最後は関係会社の経営を任されるまでになったのは、1986 年に施行された男女雇用機会均等法の力によるところが大きい。この法律が成立した頃は、努力義務ばかりで効力のない法律と批判されていたが、働く女性たちにとって働き続けることの意義を見出す力強いよりどころとなったことは間違いない。

私は、この法律の施行後、課長、部長と昇進することができたが、私より 5 年、10 年先輩の女性たちの中には、優秀な能力にもかかわらず昇格途中で定年を迎えた人も少なくない。法律がもう 10 年早かったらと悔やまれるところである。

2.4 キャリアチェンジを経験 (1990 年代)

私の人生の大きな転換点と言えば、技術部門から人事部門への人事異動である。1989 年にソフトウェアの開発の仕事から全社の女性社員の活用の仕事に大きく転換した。ここでの気持ちの切り替え、新しい仕事に情熱を持って挑戦することができたことは後々の私のキャリア形成の基盤を作り上げる上で有益だったと思う。

人事異動の辞令をもらったときは、私はコンピュータの仕事がしたくてこの会社に入った、そして子供を親に預けるために自宅近くの会社を選んだのにと思わないわ

けではなかったが、会社がここまで女性の力に期待して活用しようと考えていることが何よりうれしかった。会社のために、そして後に続く女性たちのために働きやすい職場を作りたいと思った。1989～1993年の4年間、人事部において女性の労働環境整備を行った。具体的には、育児休職や短時間勤務などの制度作り、女性フォーラムなどの開催や女性社員の育成に関する管理職向け研修などを実施した。そのときのことは、著書2冊に書き著している^{1,2)}。

3. 社外活動の重要性

会社に入って最初の20年ぐらいいは、職場と家庭を行き来するだけで精一杯の生活をしていたが、40歳を迎える頃に少しずつ外にも目を向けるようになってきた。私の場合は、キャリアチェンジがきっかけであった。今までの経験だけでは到底できない新しい仕事に直面して途方にふてていた。外で勉強して来ようと思った。まず、最初に米国の女性管理職視察団に加わってアメリカに渡った。見るもの聞くもの新鮮で刺激的であったが、特に颯爽とニューヨークの街を闊歩する米国の女性管理職の姿は目に焼きついている。その後も機会があれば、異業種の勉強会や集まりに参加しているが、ここでは、私が2008年から理事としてその活動に加わっている日本工学教育協会についてふれたいと思う。

私がこの協会の理事に就任した時は、「初の女性理事」ともてはやされた。30人近くいる協会の役員の中にそれまで女性が一人もいなかったとは、あきれ返るばかりであるがこれが今の日本の現実なのである。そこで、私は工学教育分野における女性の地位向上に力を入れようと決心した。まず、最初に、協会内の事業企画委員会の中に、女性エンジニア育成支援ワーキンググループを立ち上げ2年間活動した。最初の年(2009年)は、年次大会でシンポジウムを開き、企業で活躍する女性エンジニアや育児休業を体験した男性などのパネルディスカッションを企画した。翌年(2010年)の年次大会では、大学における高校生を工学部に呼び込むための各種取り組み(サイエンスエンジェルなど)を披露してもらった。最後には、これらの成果を会誌「工学教育」5月号(女性エンジニア育成支援特集号)で発表した³⁾。このような活動は、年2回開催される合宿や会合で熱い議論を交わし、メールのやり取りなどで意見交換を行いながら議論を深め、内容を詰めていった。会社の仕事とは一見関係ないように思えるが、会社では聞けない人たちの

意見を聞き議論することで、どれだけ知りえなかった知見を得ることができたか計り知れない。

4. 国立女性教育会館にて

さて、私は、今年の7月から国立女性教育会館の理事長として、男女共同参画社会の形成に向けた事業を担っていくこととなった。これまでの経験を生かして日本の女性たちの資質・能力をさらに高め、女性たちが今まで以上に活躍できるような社会の実現に向けて努力していきたい。

当会館では男女共同参画に関する様々な取り組みを行っているが、ここでは、「世界化学年」に纏わる行事について紹介したい。マリー・キュリーのノーベル化学賞受賞から100年の「世界化学年」を記念し、「化学と歩む～チャレンジした女性たちからチャレンジする女性たちへ」と題した企画展示を、8月29日から国立女性教育会館展示室にて開催している。マリー・キュリー母娘を始めとするノーベル化学賞受賞者のキャリア形成について紹介すると共に、近代から現代までの日本の科学分野の女性研究者に焦点を当てる。研究の歩みを辿りながら、女性たちはどのようにキャリアを形成してきたのか、そして、今、どのようにキャリアを形成しているのか、それぞれの活躍の背景を探ると共に、女性の割合の少ない理工系の分野で活躍する女性の姿を通して、男女共同参画社会の形成を推進していくための手がかりを探る展示である⁴⁾。ぜひご来館いただきたい。

5. ま と め

40年間の来し方を振り返って働き続けてよかったと思うことはいろいろがあるが、何よりも一番に思うことは、多くの素晴らしい人たちとめぐり合えたことである。そして、これからも素晴らしい出会いが待ち受けていることだろう。私のライフワークとも言うべき男女共同参画社会の実現を目指して、多くの仲間と仕事ができることの幸せを、今、かみしめているところである。

文 献

- 1) 内海房子：“私は、人事課長一年生”(日経連広報, 1990).
- 2) 内海房子：“もっと素敵にワーキングライフ”(大和出版, 1992).
- 3) 日本工学教育協会：「工学教育」5月号(2011).
- 4) <http://www.nwec.jp/jp/archive/tenji2011.html>